

週刊センターニュース No.279

第279号(2009年10月5日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm



●●● 第246回共同学習会のご案内 ●●●

日時: 10月8日(木) 16時30分～18時

会場: 角間キャンパス 総合教育1号館2階 会議室

企画: 青野 透(教育支援システム研究部門)

発表者: 山川達也(キーパッド・ジャパン株式会社)

テーマ: クリッカーを中心とした教育改善機器—学生応答・理解度把握に基づく授業を求めて—

内容: 昨年12月の中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』において、「教育研究上の目的等に即して情報通信技術を積極的に取り入れ、教育方法の改善を図る」手法として「携帯端末を活用した学生応答・理解度把握システム(いわゆるクリッカー技術)による双方向型授業の展開」が推奨されたこともあり、各高等教育機関におけるクリッカーの活用が進んでいる(大学コンソーシアム石川においても利用可能となっている)。大学教育開発・支援センターではいち早くこの機器を授業で使うとともに、各部局での活用推進を行い、その効果について学会等で発表してきている。また、今回の共同学習会では、当センターとクリッカー活用に関し共同研究を行っているキーパッド・ジャパン社の山川氏より、新製品である、携帯電話やノートPCで利用できるResponseWareを中心に紹介してもらい、学生応答・理解度把握に基づく授業をどう実現するかについての考察の一助としたい。

※参加を予定される方は、無線LANに接続可能なノートパソコン又は携帯電話をご持参下さい。

●●● BEAT セミナー参加報告 ●●●

先月5日に東京大学情報学環・福武ホールで開催されたBEATセミナー「オープンエデュケーション×教育改革」に参加したので、報告する。本セミナーではマサチューセッツ工科大学(MIT)教育イノベーションテクノロジー局シニアストラテジスト 飯吉透氏、立命館大学副総長 本間政雄氏、京都大学教授・高等教育研究開発推進センター長 田中毎実氏の3氏より講演があった。今回は飯吉透氏のご講演について報告をする。

飯吉先生よりMITやカーネギー財団の例を挙げ、教育のオープン化とその意味について、質保証や国際競争などの日本が現在抱える大学の問題に合わせて議題の提案があった。飯吉先生はオープン化の1つの例として、OCW(Open Course Ware)を挙げ、パワーポイントや映像などのコンテンツとその利用する方法を国際的に公開することでコンテンツの蓄積だけではなく、利用方法の改善、またFDの促進(単純な例ではコンテンツの利用方法の理解や利用方法の改善)などメリットがあるとされている。

しかし、オープン化するにはそれなりの大学の体制が必要であり、組織的熟練が必要であることも同時に指摘された。まず大学がイノベティブでなければならない。イノベティブな大学としてMITや京都大学の例をあげ、新しいこと、変化を作り上げ、それを受け入れることができる組織が前提にあることを説明されていた。あたらしい教育手法やシステムを導入する時にも複数の学部・学科が目標や問題点、解決策を共有し、導入の推進する効果についてMITのアクティブラーニング教室"TEAL(Technology-Enhanced Active Learning)"を例に説明されていた。ただ、このTEALの導入もMITは苦労したという。TEALで提供される教育プログラムを求めている学生に対する問題であった。もちろんTEALの効果は大講義室と比較して良い効果があることを研究をして示されていた。しかし、「良い」と思ったことが実は学生のニーズを捉えきれていないことがあり、MITはこの問題に

ついてずっと議論をしてきた。そのために MIT では大教室での講義という選択肢も作った。大教室でも教員は TEAL 以上に学生に教科への興味を持たせる講義をする努力をしている。その様子が YouTube にアップロードされていましたが、サーカスのような物理の講義で学生はその講義にのめりこんでいく様子を紹介された。

さらに MIT では国際的な人材育成の観点から学部 1 年生に海外でインターンやボランティアをさせるなどを積極的に海外へ派遣させている。飯吉先生からグローバル 30 をただの留学生受け入れの話や英語で講義をするかどうかというレベルではなく、教育のオープン化、世界の中での大学戦略と学内の人材育成まで視野に入れて考えなければ教職員も稼働だけ費やされ、実りのあるものにはならないとの指摘があった。

教育のオープン化という言葉は美しい。メリットも大きい部分もあるように思われる。しかし、教育のオープン化で掛かる予算と社会的使命に対する大学上層部と教員の意識がなければ達成しえないこと、さらに教育のオープン化によって国内の大学の質改善が促されたとしても、大学間の競争というのが消えたわけではなく、真の意味での大学の強みが試されることのように思われる。飯吉先生は MIT の例で、教育のオープン化が進んでも、MIT で受けられるメリットが全て公開されたわけではないということを新聞記事のインタビューで答えられていた。その大学で受けられるサービス、教員とのインフォーマルなコミュニケーション、研究・学習コミュニティはその大学にいないと受けられない。

これが大学の強みを何に持つのかということではないかと思う。MIT の場合、その強みを「大学の研究力」である。教育のオープン化で教育の質的改善は向上することが期待される。しかし、その時に大学の強みがないとその後、生き残っていけないのではないか。大学は教育機関でもあり研究機関でもある。このことを我々は忘れてはならないだろう。教育のオープン化によってもたらされるメリットの後のことを考え、大学の強みを何に持つのか。これはもう日本の大学はこの国際的競争の中に巻き込まれ、自分の強みを認識しなければならない時期に来ているように思う。

(文責：教育支援システム研究部門 山田政寛)

〇〇〇 「2009 年度大学コンソーシアム石川 F D フォーラム」開催のご案内 〇〇〇

テーマ：「学士力育成と教育の質保障を目指して」

趣旨：昨年12月の中教審『学士課程教育の構築を目指して』答申において示された重要な事項に、学士力という考え方があります。文部科学省も、「各大学・短期大学・高等専門学校から申請された、各大学等における学士力の確保や教育力向上のための取組」を支援する「大学教育・学生支援推進事業」を始めました。学士力の育成と教育の質保障について、機関の種別を超えて議論することは、全ての高等教育関係者の喫緊の課題です。高等教育機関教職員・学生のみならず、多くの市民の参加を期待します。

主催：大学コンソーシアム石川

日時：2009年10月17日（土） 13時～17時 （12時30分開場予定）

会場：石川県教育会館 3階ホール （金沢市香林坊1-2-40）

内容：第一部 13時10分～

- 基調講演『学士力育成と大学教育改革－金沢工業大学の実践－』石川憲一（金沢工業大学学長）

第二部 14時30分～

- 報告 （各報告 20分）

- 1 専門学習達成度試験とプロジェクト型学習による学生の能力向上
石川工業高等専門学校電子情報工学科准教授 山田洋士
- 2 「短期大学士力」育成についての課題を考える
小松短期大学学長 鹿野勝彦
- 3 金沢大学における学士力に関する学生と教員の認識－全学アンケートの結果より－
金沢大学大学教育開発・支援センター教授 堀井祐介、同 特任助教 末本哲雄

- テーマに関するパネルディスカッション（パネリスト：石川、山田、鹿野、堀井、末本）

※問い合わせ先：大学コンソーシアム石川事務局 担当：大野

TEL. 076-223-1633 FAX. 076-223-1644 E-mail : shukan2@ucon-i.jp